

地域における抗菌薬適正使用を目指し 使用状況の調査・分析を実施

薬剤部・薬局訪問 第105回 弘前大学医学部附属病院



[弘前大学医学部附属病院]
青森県弘前市本町53

- 病院長: 福田 眞作
- 病床数: 644床
- 外来患者数: 1日平均1,482人
- 外来患者への処方箋発行枚数: 1カ月平均12,015枚
- 院外処方箋発行率: 91.5%
- 薬剤師数: 28名

(2016年9月現在)

弘前大学医学部附属病院は、北東北医療圏の中核病院として、高度・高質な医療の提供に貢献しています。薬剤部では「患者さん中心の医療」を念頭に地域がん診療拠点病院としてがん化学療法に注力するとともに、大学病院の使命として感染防止対策においても院内や他施設の薬剤師と連携し、抗菌薬の適正使用に向けた意欲的な活動を進めています。それらの取組みについて、薬剤部長の早狩誠先生と、薬剤師の岡村祐嗣先生に伺いました。

患者さん中心の医療の実践には信頼関係の構築が不可欠

●●薬剤部の理念と方針をお聞かせください。

早狩 安全で適正な薬物療法に貢献することが薬剤部の基本理念です。「患者さん中心の医療」を常に念頭に置き、薬剤の処方から患者さんに投与されるまでの各過程におけるリスクを絶えず想定して業務を行っています。

安全な医療を提供するには、患者さんとの信頼関係の構築が大前提です。「患者さんと同じ目線で対話する」ために、まずは世間話などを通してコミュニケーションを図り、治療に対する患者さんの想いを把握した上で服薬指導を行うようにしています。

当院は地域がん診療拠点病院でもあるため、抗がん薬の調製をはじめレジメンチェック、処方鑑査などを十分な人員を配置して細心の注意を払って行っています。薬物治療における安全確保に妥協は許されません。「100%の責任を薬剤師が負っている」という意識の徹底とスキル習得のために、新人薬剤師にも積極的に抗がん薬の調製を担当させています。

また、患者さんに合った抗がん薬を選択するために、抗がん薬の感受性試験も実施しています。これは先進医療の一つであり、全国でも行っている施設は少ないのですが、患者さん

中心の医療の一環と考え意欲的に取り組んでいます。

病棟薬剤師や他施設と連携し抗菌薬の適正使用を推進

●●現在の担当業務と、注力されている取組みをお教えてください。

岡村 麻薬管理部門の主任を務めるとともに、消化器外科病棟を担当し、並行してICT(感染制御チーム)での活動も行っています。

消化器外科領域は、一般的に他領域と比べ術後感染症のリスクが高く、抗菌薬の適正使用において病棟薬剤師の役割が重要となります。患者さんの腎機能を考慮しつつ、効果を最大限

に発揮できる用法・用量となっているかチェックし、必要に応じて処方の提案を行います。特に抗MRSA薬については適正量を投与できるようTDMを実施しています。

●●ICTの一員として、病棟薬剤師とはどのように連携をとっていますか。

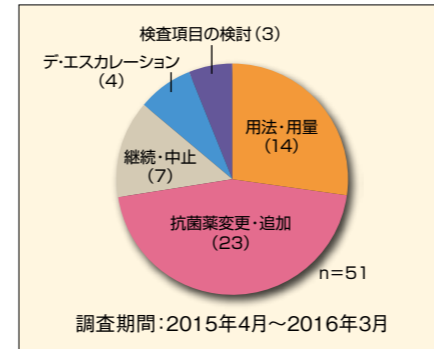
岡村 菌血症などを疑う場合は、血液培養検査の結果を検査部から入手し、病棟薬剤師にフィードバックします。そして、病棟薬剤師から抗菌薬の変更などを処方医に提案します。

このような提案は、処方医とのコミュニケーションを通して十分な信頼を得ている病棟薬剤師が行うからこそ受け入れられやすいといえます。実際に、病棟薬剤師による抗菌薬処方



薬剤部長
早狩 誠 先生

図表1 抗菌薬変更内容の内訳



提供: 弘前大学医学部附属病院 薬剤部

提案の採用率は約8割です。採用された提案の内容をみると、抗菌薬変更・追加が最も多く、次いで用法・用量、継続・中止です(図表1)。

●●院内感染対策における地域連携はいかがですか。

岡村 抗菌薬適正使用を地域で推進するために、感染防止対策加算Iの当院と、加算IIの弘前脳卒中・リハビリテーションセンターと連携し、年4回の合同カンファレンスや定期的なICTラウンドを実施しています。

連携の一環として、2施設共同で抗菌薬の使用状況に関するサーベイランスも実施しました。一般的に抗菌薬の使用量の評価はAUD(antimicrobial use density: 抗菌薬使用密度)*を指標に行われますが、この方法では総使用量の推移はわかっても使用動向の解釈に限界がありました。そこで、抗菌薬の投与日数のみを評

価するDOT(days of therapy)**を併用して解析したところ、AUDの変化が、1日使用量、使用期間のどちらの変化が大きく影響したのか把握できるようになりました(図表2)。

2施設共同で感染防止対策に取り組む、客観的な分析・評価を行うことで、抗菌薬の使用期間が短縮するとともに、より適切な抗菌薬選択への意識も高まっており、感染対策における連携は非常に有意義だと感じています。

$$* \text{AUD} = \frac{\text{特定期間の抗菌薬総使用量(g)}}{\text{WHOが推奨する成人の1日用量(DDD)(g)}} \div \left(\frac{\text{特定期間の入院患者延べ日数}}{\text{患者延べ日数}} \right) \times 1000$$

$$** \text{DOT} = \frac{\text{特定期間の抗菌薬延べ投与日数}}{\text{特定期間の入院患者延べ入院日数}} \times 1000$$

より安全な薬物療法を目指し病棟業務や地域連携に主体的に取り組む

●●今後の抱負をお聞かせください。

岡村 2施設共同の感染防止対策は成果が上がってきていますが、地域全体でみると、抗菌薬の適正使用の状況は施設間でバラツキが大きいです。

AUD及びDOTという統一指標を用いたサーベイランスを更に多くの施設



主任
岡村 祐嗣 先生
(感染制御専門薬剤師)

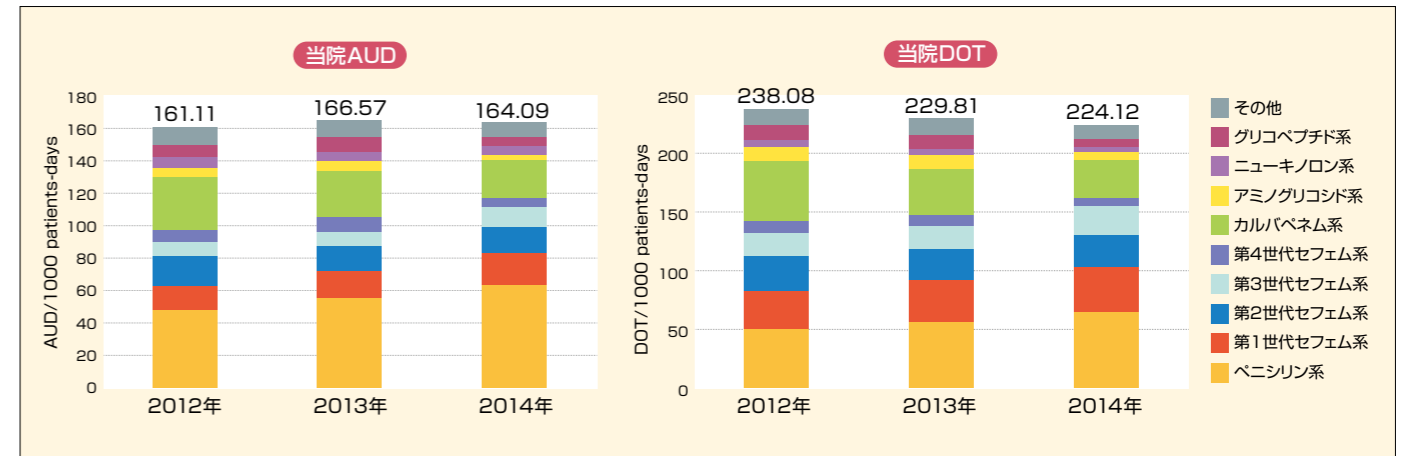
に広げ、状況をより正確に把握し、地域全体での適正使用につなげていきたいと思っています。

抗菌薬のTDMに対する理解を医師に深めてもらうことも、薬剤師の大切な役割です。病棟薬剤師から医師に情報提供する際の一助として、『抗菌薬TDMガイドライン』(日本化学療法学会/日本TDM学会)の内容も盛り込んだ手引きの作成を考えています。**早狩** 患者さんのわずかな変化にもいち早く気づけるよう、薬剤師が患者さんと直に接する機会を増やし、軽微な有害事象も迅速に把握、必要な場合にはPMDA(医薬品医療機器総合機構)に報告する体制を更に充実させたいと考えています。その情報の蓄積が、より安全な薬物療法につながるはずだと考えています。

また、薬剤師の業務が拡大する中、自分たちが薬剤部を支えるのだという自覚を持ち、自分で考え、自発的に課題を見つけて行動できる薬剤師の育成も、これから注力すべき重要なテーマと考えています。

保険薬局との連携強化も今後ますます重要になります。将来的には、保険薬局で患者さんに説明した内容を病院にフィードバックし、情報を共有できる仕組みを構築することで、「患者さん中心の医療」を更に推進していきたいと思っています。

図表2 AUD及びDOTによる抗菌薬の使用量推移



総AUDは横ばいだが、総DOTは年々減少しており、抗菌薬の総使用期間の短縮が推察された。

提供: 弘前大学医学部附属病院 薬剤部